

第4回下水道中長期ビジョン小委員会 議事概要(案)

日時 平成16年7月13日(金)10時00分～12時00分
場所 日本下水道協会第1・第2会議室
出席者 委員長 花木委員(東京大学大学院)
委員 高見委員代理(大久保委員代理)、齋藤委員
曾小川委員、藤田委員、山田委員

-
- 議題:(1) 開会
(2) 議事
1. 話題提供(齋藤委員)について
2. 法制度小委員会の概要について
3. 下水道中長期ビジョンのアウトプットイメージとスケジュールについて
4. 中間報告に関する 論点(主要な論点)について
5. その他
(3) 閉会
-

議事:

【主な意見等】

下水道の役割について

- 下水道行政は大きな転換期。これからは、「循環」がキーワード。循環型社会の中での位置づけの自覚が必要。マイナー意識から脱却すべき。下水道は循環型社会作りの面で主導的な重要な役割を負っているという使命感・誇りを持って頂きたい。
- 処理場は水の再生工場と考え方を変えるべき。汚泥は廃棄物ではなく中間産物という位置づけが必要。リンについては、富栄養化対策としての処理を考えていくのか、資源として回収していくのか、考え方を明確にすべき。発生エネルギーの回収・活用については、事業採算性と費用対効果が問われる。
- 水量に関する議論が不十分。水量は水循環の重要な要素。下水道分野でも、従来から中流域でのバイパスが問題視されてきた。積極的に水収支を把握し、メッセージを出していくべき。
- 都市内で水を探すのは大変な状況。湧水や地下水の管理者が判然としない。放流の分散化のほか、下水に受け入れられないでもよい水の基準を柔軟に考えることも必要(例えば、風呂水を宅内で散水に用いるなど)。
- 役割を考えるにあたっては、下水道の由来(経緯)を整理すべき。明治時代に考えられた下水道が世の中の変化によって機能不全を起こしているのであるから、原点に返って欠点を精査し、方向転換を考えるべき。
- 雨水の貯留浸透については、なかなか普及しないというのが実状。その理由を考えるべき。場合により義務づけが必要か。

下水道の抱える課題について

- 老朽化は大きな課題。下水道の広範な役割を考える際、ベースはあくまで現在のストック。道路陥没等が深刻化している一方で、対策は対症療法的。下水道の目的を充実する視点として、老朽化対策を明確にすべき。
- 臭気も景観の一要素と考えられる。悪臭に対する関心を持つべき。
- 下水道施設が消費電力量の 0.6%を占めるのは重大と認識。ソーラー電池や自家発電の導入など、緊急時対策の側面も踏まえ、対策を検討すべき。
- 地震に対する安全性への認識が必要。阪神大震災でトイレに困ったという教訓が生かされていない。

情報公開・PR について

- アカウンタビリティの面で、下水道は立ち後れている。
- 利用者の視点に立つと、供給側と利用者は対等でなくてはならず、そのためには情報の共有化が不可欠。下水道使用料の決め方やその背景にある費用について、市民には理解困難なことが多い。
- 安全性と費用との兼ね合いを住民に示すことが大切。局所的・集中的なゲリラ豪雨が頻発しているが、自分の住んでいるところにどの程度の危険があるのか分からず、個人も対応がとれない状況にある。
- 名前は極めて重要な事項。終末処理場のネーミングについては、「水再生施設」より「水循環施設」の方がよいのではないかと。
- また、パリの下水道のように、使用している状態を常に見せられるような施設が重要。東京の真中では不可能なのか。できれば公開すべき。
- 定年退職された下水道 OB に下水道ボランティアとしてご登場頂くことも一案と考えられる。

役割分担について

- 循環システムとして生き残るには、地域との協働がキーワード。
- 役割分担については、信濃川のような県際河川に対しては、県際下水道のようなものが打ち出せるとよい。管理主体を流域単位とし、民間・公社等による新たな仕掛けも必要かと考える。
- 下水道についても民営化の動きがなきにしもあらずだが、その場合、公共性をどこまで担保するのが重要な課題。民営化の賛否は別として、考えておく必要がある。

以上